

鹿児島大学島嶼学概論Ⅰ 硫黄島視察 レポート

農学研究科生物生産学専攻 3412810028 山崎聡士

・2012年7月14・15日に、島嶼学の一環として硫黄島へ行った。今まで硫黄島という名前は聞いたことはあったが、行ったこともないし三島村という村に属していることもほとんど知らなかった。今回の視察で、私は三島村のこと、そして硫黄島とはどのようなところでどのように人々が生活しているかということを少しは知ることができたと思う。今回の視察の内容を、順を追ってまとめていくことにする。

まず、硫黄島にはフェリー三島で向かった。三島へ行くためには基本的にはフェリーのみである。フェリーは人を運ぶだけでなく、島の人々の生活物資を輸送する大切なものである。運航は週に3回のみで、天候が悪い時は欠航とはならず運航延期となる。出航前には弁当屋とパン屋が港を訪れ、そこで昼食を購入した。フェリーはまず、竹島に寄港し、硫黄島を経て黒島に向かい、同じルートを通して鹿児島へ戻ってくる。船内では、操舵室を見学させてもらうことができた。多くの計器が並ぶ操舵室には、船長を含め5人ほどの乗組員がおり、安全に航海ができるように各々計器を確認したり、望遠鏡で前方を見たりしていた。船の航行には、世界共通のルールがあるらしく、漁船や他の船とすれ違ったりするときなどは全てそのルールにのっとって操縦が行われているという話を聞くことができた。乗客はそこまで多いわけではなく、普段は10～20人程度しか利用していないそうだ。経営としては赤字であるが、補助金などで船を出しているそうだ。だが、夏季は釣り人や観光客が多く乗船し、お盆には定員ぎりぎりの250人の乗客が乗りこむとのことだった。

操舵室の見学の後、三島村とジャンベについてのビデオを見た。ジャンベとはアフリカで生まれた手で打つ太鼓のことで、三島村では十数年前から盛んに行われている楽器である。三島村でジャンベが発展したことには、ママディ・ケイタさんという西アフリカの人が深く関わっており、それについてのドキュメンタリーである。ジャンベという音楽を通じた国際交流のため、三島村を訪れたママディさんだが、実のところ三島村が選ばれたのは偶然だったそうだ。それを機会に現在までジャンベが発展したということを知ったときは、とても価値のある国際交流であったのだと感じた。

鹿児島港を出発してから約4時間でフェリーは硫黄島に到着した。入港するとき、港では島民の人々がジャンベを演奏し、踊りながら歓迎してくれた。フェリーから降りるときに目に留まったのは、降ろされるコンテナ

に集まる島民の人々の姿だった。この島にとって、いかにフェリーは大切なものであるかということを実感した瞬間だった。

島に到着して、その日宿泊するみしまジャンベスクールに荷物を置いた私たちは、硫黄島の様々な場所を車で巡った。まず最初に向かったのは、三島小中学校である。そこでは、公園の木陰で校長先生の話聞くことができた。年々生徒数が減少している三島小中学校では、複数の学年を同時に見て指導しているそうだ。特に中学生は、高校受験を控えているため指導は大変なのではないかと思っていたが、様々な工夫で教育を行っているということを知った。また、先生から硫黄島の生態系についての話を聞くことができた。硫黄島に到着した時にまず思ったのが、港から見える山々が屋久島で見たものと似ているということだった。硫黄島も、屋久島と同様に今まで人が手をつけていない原生林なのだそうだ。また、植物や虫は様々な種類が生息しているが、哺乳類は生息していないとのことだった。しかし、昔硫黄島にリゾートがあった時に飼っていたクジャクが野生化し、クジャクだけは多く生息していることが実際に島を巡って分かった。

次に向かったのは、肉牛を飼育している硫黄島の牧場である。その人は昔北海道で牧場をしていたらしいが、硫黄島と北海道とでは勝手が全く違うと言っていた。もちろん最も違うのは気候である。気温はもちろんのこと湿度などあらゆる面で異なっているため、最初は大変だったようだが、飼育小屋に扇風機を設置したりなど、多くの工夫をすることによって良質の肉牛の生産に成功していた。一番驚いたことは、牧場で使用する機械のことである。硫黄島は、潮風が吹くことはもちろんであるが、硫黄岳から亜硫酸ガスが噴出し漂っている。それにより、通常は1年くらい放置しても問題ない機械が、数か月放置するだけで使用不可になり廃棄するしかなくなってしまうそうだ。このように、異なる気候の地域での畜産には、多くのメリット・デメリットがあるのだということが分かった。

それから岬橋へ行き、硫黄島の風景を楽しんだ後、薩摩硫黄島飛行場を車で走行した。飛行場といってもほとんど滑走路しかないようなものだったが、硫黄島に飛行場があることは初めて知った。硫黄島にはキャンプ場もあり、その後向かった冒険ランド硫黄島は、バンガローなど自然を満喫することができそうな場所だった。

また、平家城展望台は、中村勘三郎の像があり、硫黄岳を一望できる素晴らしい場所で、そのあと行った東温泉は、満潮により海に浸かっていたもののきれいなところだった。

一通り島を巡りみしまジャンベスクールに帰ってきた私たちは、ジャンベワークで実際にジャンベを叩いてみることができた。ジャンベには3つ

の音の種類があり、それを組み合わせることによって様々なリズムを作り出すのだ。そこではそのリズムのうちの1つをやったのだが、3つの音を出すことは難しく、ジャンベを使ったことのない私には手が痛かった。だが、リズムに合わせてみんなでジャンベを叩くのはとても楽しかった。

その日の夜は、硫黄島の祭りに参加した。祭りでは多くの出し物があり、ジャンベはもちろんのこと、盆踊りなども見ることができた。焼きそばや焼き鳥、ビールまでが100円だったことには驚いた。ジャンベは、まず最初は小中学生の子供たちだった。私はちょっとジャンベに触れただけだが、子供たちがいかに多くの練習をしたということがすぐに分かるような演奏だった。出し物の最後には、島の大人の人々も交えての演奏だったが、これはとにかくものすごい演奏だった。ジャンベの技術の高さは言うまでもないが、何より迫力があり会場全体が大盛り上がりだった。この祭りを通して、三島村ではジャンベがいかに身近で盛んに行われているものであるかということを感じさせられた。

今回の旅を通して、島の自然、人々の生活、観光スポット、島に根づく文化など、硫黄島、そして三島村について少しは知ることができたのではないと思う。また、特にジャンベは三島村だけでなく、日本各地様々なところで行ってもいいのではと思えるくらい素晴らしいものだった。機会があればまた行ってみたい。硫黄島はそんな場所だった。